様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２３５８

研究課題名（和文）年代記類の世界と『河海抄』の空間

研究課題名（英文）The Historical World made by Annals of the Medieval Japan and Kakai-sho

研究代表者
吉森　佳奈子（YOSHIMORI, Kanako）

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：１０３０２８２９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：『源氏物語』全巻注釈の早い例である『河海抄』に注目し、とくに、そこに引用される歴史記述に注目、虚構の物語の注釈に史実が大量に引用されることのもつ意味を問い、六国史以後、正史をもたなかった日本で、歴史認識はどのように生成されたかという問題に『河海抄』が深くかかわっていることについて考察した。さらに、その成果をふまえ、従来の研究では、善本がないと見なされてきた、『河海抄』の複雑な異文状況を解きあかすひとつの糸口が、歴史認識生成の現場としての『河海抄』という問題設定にあることを具体的に提示、本文を見きわめる斬新な文献学的方法を学会誌等への論文執筆によって公表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　近時、『源氏物語』注釈書類は海外でも注目を集め始めている。日本の文化的な資産がグローバル化された世界の学問レベルで注目を集めようとするときに、入念な基礎研究に支えられた独創的な視座を示すことは重要な責務であり、本研究は、そうした貢献を行ってゆくことを目ざして企図されたもので、充分な成果をあげたと言える。
　また、そのような昨今の国際的な学問上の要求から、包括的な視座による『河海抄』研究に基づく本文の翻刻、公表は急務であり、現状に貢献すべく、研究の総括として、『河海抄』本文刊行に向けての文献学的調査も精力的に行い、本課題の研究は、将来に向けての研究の一段階としての意義も担い得た。

研究成果の概要（英文）：Kakai-sho (K.) is one of the earliest commentaries on all of the volumes of the Tale of Genji. The author of this K., YOTSUTSUJI no Yoshinari (Y.), did not write those notes for the benefit of reader's comprehension of the Tale. According to the research representative, Y. commented on the fictional Tale with citations from real history so that he might make that Tale "true history". This attitude of Y., as a result, brought about the formation of the historical recognition of Japan. Scarcely any attention is payed to the old Japanese dictionaries today, since they do not help us know meanings of the vocabularies. However, according to the representative, we can find similarities between the general tendency of the old dictionaries and that of the commentary by Y. The representative thus proved that the old dictionaries were related to the formation of the historical recognition of Japan.

研究分野：人文学

キーワード：『源氏物語』　『河海抄』　年代記類　重宝記類　『一代要記』　『帝王編年記』　「日本紀」　『三教指帰』

１．研究開始当初の背景

『河海抄』（四辻善成。『源氏物語』全巻注釈の早い例）は、近時、日本の国内外を問わず、歴史学、日本語学、思想史等、人文学全体にわたる多彩な価値を持つことが注目されるようになり、『源氏物語』注釈書としての意味にとどまらない広い視座による研究が俟たれる状況にあった。研究代表者は、夙に、単著『『河海抄』の『源氏物語』』（2003 年。第 6 回紫式部学術賞受賞。2018 年再版）を公刊するなど、この状況にかんして、牽引役となる研究を精力的に継続して行っており、先掲単著が初版後 15 年を経て再版されるなど、研究成果は息の長い評価を得ている。その研究の過程で、『源氏物語』の注釈史が、六国史後、官撰国史をもたなかった日本において歴史認識はどのように構成されたかを解明する生きた資料の集積であることに留意するようになった。その成果が注目され、海外からの、研究指導や論文執筆依頼を受けるようになるに至り（「『源氏物語』の注釈史について」（原文は中国語。蔡苗苗訳）、中国長春理工大学中日比較文化文学研究年刊『中日文化文学比較研究』、2013 年、国際依頼論文）、さらに発展的に研究を行うべく本研究計画を企図した。

２．研究の目的

本研究は、虚構の物語作品の享受史が同時代の歴史認識の形成に深く関わっているという独創的な見通しを基盤とし、従来注目されることのなかった資料の文献学的な精査も併せ、発展的に研究を行うことで、日本文学、日本語学、日本歴史、日本思想史の各分野に新たな創造的視点を提示することを目ざすものである。

特に近代以降の日本文学研究において、注釈書は、作品をよみ、理解するための補助的役割を担うものと見なされ、必要に応じて部分的に参照され、その全体像や思想史的意義について問う視座が発想されることはなかった。また一方で、歴史学研究では、物語作品である『源氏物語』とその注釈史が研究対象として注目されることはなかった。そのような状況にあって研究代表者は、『源氏物語』をなりたたせた知の系譜という視座で『源氏物語』注釈史に注目して斬新な方法論を提示しつづけてきており、本研究課題においても、虚構である物語作品が生きてきた空間が、同時代の歴史記述の形成に深くかかわっているという独創的な見とおしに基づき、発展的に研究を継続することで、日本文学、日本歴史、日本思想史の各分野に新たな視点を提示することを目ざす。

さらに、『河海抄』の文献学的研究をすすめる。中世、近世において共有された教養の基盤が生成された現場として『河海抄』を捉えだす視座を提案することで、善本はないと指摘されつづけ、本文研究が一定以上にすすまない現状を打開し得ると考える。

単著書におけるテーマである、平安時代末から近世にかけての人々の知の現場としての『源氏物語』注釈史を捉えなおす研究を、文献学的な問題、学問の枠組みの問題もあわせ、より広汎に展望し、文化の継承、歴史認識の生成にかんする新たな視座の提起を目ざす。

所謂正史が『日本三代実録』で終った後の歴史記述の問題については、歴史学の分野で、私撰国史にかんする研究成果がないわけではないが、研究代表者は、これまでの研究活動をとおして、『源氏物語』享受の流れのなかで、とくに中世期、この作品が物語でありながら、歴史的事実のように見なされ、先例として機能するようになってゆく状況を指摘してきた。それについて、記録類を調査し、さらに、『河海抄』を中心とする『源氏物語』注釈書が、中世、近世の歴史認識の形成に深く関与しているのではないかという見通しを得るに至った。研究代表者はこれまで、物語の歴史化の事例が認められるのは中世までと考えていたが、本研究課題の研究を通して、近世の、部類、辞書類、広く流布した注釈書類（たとえば、『三教指帰』注など）に、『河海抄』の記事が『源氏物語』注釈書であることからまったく離れて、歴史や、ことの起源にかんする記事として引用されている事例を確認した。その研究によって、この書が『源氏物語』注釈という枠を超えて生きてゆくことの意味の大きさをあらためて確信するに至った。

単著書におけるテーマである、平安時代末から近世にかけての人々の知の基盤としての『源氏物語』注釈史を捉えなおす研究を、文献学的な問題、学問の枠組みの問題もあわせ、より広汎に展望し、文化の継承、歴史認識の生成にかんする新たな視座の提起を目ざす。

３．研究の方法

A.年代記類を中心とする私撰国史生成の問題に注目した、中世、近世の歴史認識の生成にかんする基礎的研究。

B.近世期に多く用いられた重宝記類および『源氏物語』以外の作品の注釈史に注目した教養の枠組みの継承にかんする研究。

C.『河海抄』の伝本状況にかんする文献学的研究。

さらに具体的にのべる。

「研究の方法 A」については、『河海抄』と同時代の、年代記類をふくむ私撰国史を中心にとりあげて考察する。『河海抄』に認められる傾向として、起源への興味、初例探求への志向を指摘することができるが、それは同時代の私撰国史、さらに近世の重宝記類にいたるまでの記述

の特質としても認められるものである。ひとつの歴史認識の傾向ということができるが、それが『源氏物語』の先例化にどのようにかかわってゆくかを考察する。
　また、『河海抄』に引用される文献のなかで、とくに目を引く頻度であらわれる「日本紀」の問題について考察する。これは、「研究の方法 B」とも関連するが、『河海抄』の「日本紀」が、とくに近世期、どのような世界にひろがっていることを具体的にたしかめる。
　さらに、『河海抄』と同時代の年代記類をふくむ私撰国史を中心に考察する。『河海抄』に認められる傾向として、起源への興味、初例探求への志向を指摘することができるが、それは同時代の私撰国史、さらに近世になると、部類と年代記類を兼ねるような重宝記のような書も生まれてくるが、それらのなかにも認められ、中世から近世にいたるまでの歴史的記述の特質としてたしかめられるものである。とくに先述した重宝記類の問題は、『河海抄』が、出版文化の時代にあっても書写されて生きつづけた状況の背景にあるものを具体的にうかがわせる教養のひろがりであることを具体例にそくして指摘する。
　また、重宝記類に認められる、時間軸上に部類的な要素を捉え出す発想は、『河海抄』と共通するばかりでなく、実際に部類の類に『河海抄』は引用されている。年代記類のつくり出した歴史のなかで『河海抄』がどのように生きていったかという視座から見たとき、従来、既存の歴史書の再構成であるとして、歴史学の分野において殆ど顧みられることの少なかった年代記類、重宝記類の新たな位置づけを提案し得る。
　そこに認められるものはいずれも、歴史認識の方法ということができるが、それが『源氏物語』の先例化にどのようにかかわってゆくかを考察する。
　「研究の方法 B」については、中世の字書類に注目し、『河海抄』に特徴的な、和語に漢字をあて、出典を記す注が、古い段階の『節用集』に『河海抄』を典拠として引用された例が見られることを指摘、さらにそのような注が古字書、中世の言葉にかんする研究世界でどのようなひろがりをつくってゆくか、「研究の方法 A」の成果との連関を確保しながら、具体的にあきらかにすることをこころみる。
　さらに、『源氏物語』以外の注釈書にも目をやり、『三教指帰』およびその注釈史が『源氏物語』注釈史と緊密な接点をもつことを指摘、包括的、総合的に『源氏物語』の生きた空間、注釈史がつくってきたものを思想史的に問う。古い段階の『三教指帰』注釈書（『三教勘注抄』、『三教指帰注』、『三教指帰注抄』等）と『河海抄』とのあいだに、直接的と推測される影響関係があることを確認して考察をすすめる。対象となる作品がまったく異なるジャンルであるために従来注目されることのなかった問題であるという点は、同時代の歴史認識生成の現場的な資料として『河海抄』に注目する本研究の基盤と軌を一にするが、所謂ジャンル認識の背景にある近代以降の知的地図の偏りへの認識もふくめ、今後も問いつづけてゆくべき問題である。
　「研究の方法 C」については、善本はないと指摘される『河海抄』の複雑な異文状況が、同時代の歴史認識の問題と不可分に生じたものであることを解明する研究として、日本ではじめて出版文化を育てた近世の文化的達成のなかであらわれた、『源氏物語』本文を全文あげた注釈書、『首書源氏物語』、『湖月抄』に注目し、前代の注釈書類がどのようにうけつがれたかという問題を考察する。さらに、「研究の方法 B」の研究と関連させながら、和語に漢語をあてる注に注目し、契沖、賀茂真淵と、本居宣長とでは、注の意味の見いだし方が異なることを指摘する。
　研究の全体をつうじて、物語の注釈が史実によってなされることについて、六国史後、正史を持たなかった日本において、歴史認識はどのように構成されていったかという問題を、本課題の基盤となる問いかけとして研究をすすめる。

４．研究成果

　従来の日本文学研究において、『源氏物語』の注釈書類は、作品を読み、理解するための助けとして用いるものと見なされ、必要に応じ部分的に参照されるにとどまり、その全体像や思想史的意義の大きさについては留意されることがなかった。また一方で、所謂官撰国史が『日本三代実録』で終った後の歴史記述の問題については、歴史学の分野で、私撰国史に関するすぐれた研究はあるが、物語作品の注釈書でありながら年代記類を中心に多くの歴史記述を引用する『河海抄』が研究対象として注目されることはなかった。そのような状況にあって本研究は、『源氏物語』を成り立たせた知の基盤という視点で『源氏物語』注釈史に注目し、これまでも斬新な方法論を継続して提示してきたが、今回、記録類を調査し、『河海抄』を中心とする『源氏物語』注釈書が、歴史認識の形成に深く関与しているのではないかという見通しを得て考察されたことは、本研究の重要な学術的成果のひとつである。
　特に年代記類の問題は、歴史学でも、日本文学でも、未開拓の部分の多い研究分野であるが、重宝記類等に切り入れられながら、身分を問わず、近代以前の人々の常識、教養を構成するものであった。研究期間をつうじて、平安時代以降作られ続けた年代記類に注目し、『河海抄』のあげる歴史記述がこのようなものによっていること、それが近世に至るまで引用をくり返し、教養の基盤の生成に深く関与していることを指摘する研究を継続して行い、虚構の物語作品の享受史が、同時代および後の時代の歴史認識の生成に深く関わっているという独創的な見通しに基づき、資料の文献学的な精査とあわせ、発展的に研究を継続することで、日本文学、日本歴史、日本思想史の各分野に新たな創造的視点を提示することを目ざした。
　さらに、近世の部類、辞書類、広く流布した注釈書類（たとえば、『三教指帰』注釈など）に、

『河海抄』が『源氏物語』をまったく離れて、歴史や、ことの起源に関する記事として引用されている事例を確認し、この書が物語注釈という枠を超えて生きてゆくことの意味とその空間の問題に関する新たな展望を提示することをこころみた。具体的には、中世以降さまざまになされた『源氏物語』注釈書の抜書的再編成の調査とその享受のひろがりの解明につとめた。これらについては、従来の研究では、私的な営為と見なされ、その価値が充分に認められずにきたが、このような書の存在は、『河海抄』が近世において、『源氏物語』注釈の枠を離れ、重宝記的に利用されていたこと、そのことが『河海抄』の享受空間に広がりを作っていたこと、さらにそのような状況が持つ意味を問う手がかりになるとの見通しを得て研究を進めた。何故、『河海抄』はインデクス化されたのかという問いかけは、注釈書は作品をよんで理解するための書であるという近現代の常識を問い直し、新たな視座で注釈史を考える契機ともなるものである。

上記の研究成果は、『河海抄』の伝本研究への問題提起と新たな視座の提示となり得る。善本はないと言われる『河海抄』の複雑な異文状況の少なくとも一部は、同時代の歴史記述との対照によって読み解くことができるとの見通しを本研究の過程で得た。異文発生と歴史認識生成の現場を往還的に見ながら『河海抄』の伝本を整理することを研究の目的としたが、それは、従来の、諸本の所有者、書写者など、人物関係に帰す研究の常識を覆す方法論の提起であり、それを基盤として支えるのが、『河海抄』が、『源氏物語』を離れた享受空間を構成し生きていたことを現代に伝える『源氏物語』注釈書の抜書的再編成に関する研究である。

『源氏物語』の注釈史を、延宝年間の出版文化から顧み、注の意味の見いだし方の変化についてあきらかにすることを試みたものである。同時に、日本の文化的資産が世界の学問レベルで注目を集めようとする現状にあって、入念な基礎研究に支えられた独創的な視座を提示することは重要な責務であることにたいして充分な貢献をし得たと確信するものである。

本研究計画の三年間は、基礎研究に集中して実績を積む機会に恵まれ、これまでの自身の視座を対象化し鍛えなおす機会としても有益であり、さらなる研究継続をめざす。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 4 件）

1. 吉森佳奈子、「書評　松本大著『『河海抄』を中心とした中世源氏学の諸相』」『日本文学』第 67 号、2018 年、pp.66-67、査読無（依頼執筆）

2. 吉森佳奈子、「書評　原岡文子・河添房江編『源氏物語　煌めくことばの世界Ⅱ』」『図書新聞』第 3365 号、2018 年、p.5、査読無（依頼執筆）

3. 吉森佳奈子、「『河海抄』の注の終焉」『国語国文』（京都大学文学部国語学国文学研究室）第 86 巻第 12 号、2017 年、pp.1-15、査読有

4. 吉森佳奈子、「『河海抄』の注がしめすもの」『青山語文』（青山学院大学日本文学会）第 47 号、2017 年、p.215、査読無（依頼執筆）

〔図書〕（計 1 件）

吉森佳奈子、『『河海抄』の『源氏物語』』2003 年、和泉書院が、再版された。2018 年、全 287 頁

６．研究組織

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。